

国家と詩人

(下)

佐々木 滋子

4. 詩人と教員

既に（本誌前号掲載部分で）述べたように、非公式の回路を通して国家に向けて発話される全ての言葉は、詩人の延命という至上目的を達するために、ステファヌ・マラルメという人物を、詩人とは別のものとして国家に受容させようと試みている。確かに、この試みは全くの虚偽の上に成立しているわけではない。マラルメは、自分を何よりも先ず詩人（エクリチュールの実践主体）であると考えていたとしても、同時に他方では明らかに教員であったし、一定の権利と義務によって構成されているブルジョワ的主体でもあった。同様に彼は、セニョポスやルージョンを始めとする社会・政治的権威を担った何人かの人々と、直接的にか間接的にか、何らかの親密さもしくは友情を含む絆によって結ばれており、この結びつきゆえに、彼等の庇護の対象となってもいたのである。だが、これらの規定は、マラルメがそのエクリチュールの実践によって自らを位置づけた詩人という本質的な規定からすれば、偽りの、とは言わないまでも、二次的・周辺のものではない。非公式の回路が発する言葉は、国家が異論の余地なく認め、受け入れることのできる人物像、つまり国家の誤認の許容範囲内にある人物像に迎合するために、変形に次ぐ変形を重ねて、マラルメという人物に関する諸規定のますます二次的・周辺のものへと転位していく。その結果、この人物は、詩人というその本質的な規定から遠ざけられ、誤認の中へと閉じ込められていくのである。このことが、非公式の言葉の回路の本質的な矛盾を構成している。ところで、注意しておかなければならないのは、非公式の回路のこのような機能はマラルメの意に反していたのではなく、むしろマラルメ自身が進んでそれを求め、指揮していたという事実である。このことを念頭においた上で、非公式の回路の本質的な矛盾を言い換えるなら、詩人の延命のためにのみ存在しているこの回路は、その時々個々

の目的——エクリチュールの実践を容易にするような何らかの物質的条件の獲得——に成功した時でさえ、結局は詩人の抑圧に手を貸している、ということになるだろう。確かに成功は、教職が詩人に加える現実的抑圧の諸条件の若干の軽減をもたらす。だが、その場合でも抑圧の本質的なものは存続している。なぜなら、詩人の存在は隠蔽されている、言い換えれば語られていない、そして語られないものは再認されず、従ってそのものとしては禁じられたまま、詩人とは別なものが、この本質的規定に対する誤認だけが、認められ、受容されるからである。従って、非公式の回路は、もっと正確に言えば、マラルメ自身がこの回路を通して行っている詩人の隠蔽は、国家による詩人の抑圧に抵抗する手段ではなく、(たとえその意図が詩人の延命にあったとしても、)むしろまさしくこの抑圧が取る形式そのものとなるのだと言わなければならない。

抑圧のこの形式は、もしもっとも有効に機能したならば、国家にとっては理想的なものとなったであろう。なぜなら、この形式は抑圧する審級(国家)の内在化を前提としているからである。その結果、第一に、詩作は、教職からの疎外を受け入れるという前提でのみ、教職との住み分けを許されることになる。言い換えれば、誤認の積極的な産出は、確かに教職の外に詩人の延命の余地を保証するものであるとしても、同時に、詩作を教職の絶対的余白に位置づけることによって、教職を保全するものでもある以上、国家の要求を前もって満たしてもいるものなのである。第二に、確かに、教員と詩人という自己の二つの社会的活動をこのように排他的な形で共存させることは、いかなる主体にとっても困難な緊張を強いるであろうが、それは国家の関知しない事柄である。なぜなら、抑圧する審級としての国家が既に内在化されている以上、教員と詩人のこの排他的共存、詩人のこの疎外が、国家の直接的介入を待たずに、マラルメという人物の内面でのみ実行されることこそが、この抑圧形式の要請していることだからである。

教員マラルメがともかくも30年の年月を生き延びた以上、教職と詩作はその間を何らかの形で共存し続けたことになる。しかし、この共存は必ずしも、詩人が教職からの疎外を承認しつつ、教員と住み分けるという形で実行されたわけではなかった。検閲結果は、隠蔽されねばならず、また実際隠蔽されたはずの詩人の存在が、誤認を裏切っては、繰り返しその姿を露わにしたことを物語っているからである。詩人と教員の共存はむしろ住み分けとは異なる形態を取ったのであり、その結果、住み分けという妥協自体が、たびたび危機に晒されたのである。この意味で、非公式の回路が直面する第二の矛盾——検閲結果に対する矛盾——は、詩人の隠蔽=抑圧が教職と詩作

の住み分けを押しつけることによって引き起こす葛藤の、詩人の側からの（しばしば破局的な）解決として立ち現れてくる、とすることができる。

このことを確認するために、検閲が摘発した詩人の存在をここでもう一度振り返ってみたい。検閲の指摘に従えば、詩人の存在は三通りのやり方で教職を脅かしているが、それらは同時平行的に認められるというよりは、むしろマラルメという人物に関わる主要な三つの規定——本質的規定としての詩人（エクリチュールの実践主体）と、その誤認としての教員及び「詩人」（社会的に認知された詩篇の作者）——の間の関係の変化に応じて、継起的に生じている。

検閲が最初に詩人の存在を指摘したのは、教員マラルメの最初にして最大の危機となった1866年のトゥルノンのスキャンダルの時のことである。事件に関する国家側の証言から判断すると、問題の争点は、この教員が単に幾つかの詩篇の作者であるという点にではなく、その詩篇が、父兄の反発を引き起こした結果、公共教育に多大の支障を招いたという点にあった。マラルメ自身はこの反発の原因を、詩及び詩人一般に対するトゥルノンの田舎ブルジョワの反感に求めているようである⁽⁸⁰⁾。だが当時マラルメの幼い生徒だった歴史家シャルル・セニョポスの回想によると、マラルメが「皆の物笑いになった」のはとりわけその詩句の異様さのためだったらしい⁽⁸¹⁾。要するに、既に引用したルノーの批判の言葉を再び借りるならば、「一般の人々には、意味がつかめない」ような「度を越した文の錯綜」からなる詩篇のエクリチュールが、問題だったのである。このことが十分にスキャンダルの原因となりえたことは、ルノーの批判の傍らに、同じく『第一次現代高踏詩集』に発表された別の詩篇《Les Fleurs》に関する、ルージュンの後年の回想録に見られる次の批判を置いてみる時、想像に難くない——「それはいまだに甘美な詩節であり、ゴティエがそこに《輝かしい稲妻が横切る幾分意図的な行き過ぎ》を指摘したことは正しかった。だが、確かにここで詩人は、思考の大地を音の楽園から隔てる、きわめて見分け難いあの境界に危険なくらい接近していないだろうか。その向こうに目路の限り開けているのは、作家には禁じられた飛翔である。これ以上遠くに行くのは危険なのだ」⁽⁸²⁾。数十年近い年月を隔てて齟齬するこれら二つの批判は、詩人マラルメが初期詩篇の時点で既に、理解可能性（意味・思考）を犠牲にしてまでも、音楽と文芸とを統合するような言語を自らの詩篇の言語として追求していたことを物語っている。だが、この追求が父兄の怒りと嘲笑を招いたということは、単に教員が「詩人」（詩篇の作者）であることがではなく、まさしく、彼等が教員であると考えていた人物が、彼等とは異なる言語を語る存在（詩人）であったということ自体が、許しがたいものだったということに他ならない。

同様のことが、国家に関しても言えるように思われる。スキャンダル以前と以後の検閲の言葉を比較してみると、そのことが確認できる。先ず1864年6月の総視学の際の「極秘報告」は、初めて教壇に立ったこの若い教員について、その未熟さに対する批判を惜しんではいないものの、全体としてはかなり好意的に語っている。

1864年6月11日付け視学官スピエの所見「マラルメ氏は極めて若く、従って経験がない。氏の方法にはそのことが見て取れる。〔……〕結局氏には職業的自己形成の必要がある。氏には素質がある。〔……〕氏は良い英語教師となることを約束している。」(79)

同年、大学区長クルタードの所見「マラルメ氏は教育を始めたばかりであり、経験を欠いている。氏の方法はまだ十分に固まっていない。〔……〕だが氏には将来がある。氏は教育がある人物であり、話し方もうまく、関心も旺盛である。そればかりか職務に対する熱意と献身も示している。／〔……〕／氏は上司、同僚、氏を知る全ての人々の尊敬を受けている。」(80)

だが、スキャンダルの渦中に当たる1866年5月の「極秘報告」は、この教員を批判する時、全く異なる口調を採用しているように思われる。

1866年5月24日付け視学官アドレ＝メスナルの所見「〔……〕洞察力と分別：あまり公正ではない精神。〔……〕／雄弁さ：よく語るが、熱意がない。偽りの獨創性。／教育：英語をよく知っている。現代フランス詩人（ロマン派）に多大の関心を示した。／〔……〕／マラルメ氏は、その精神と学識——それを私は氏に対して反論するつもりはないが——にもかかわらず、これまでその教育の貧弱な結果しか得てこなかった。〔……〕私はこの悪の源を見出さなければならなかった。そしてそれを教師の冷淡さと、一瞬毎に生徒を叱りつけて、考える時間を与えないという点に、垣間見たように思う。この教師は息をきらし、生徒達は機械的に反復するが、何も覚えていない。〔……〕」(89)

同年5月26日付け大学区長クルタードの所見「マラルメ氏は若く、かなり教育のある教師であり、人材としては厳密であるから、それについては何も言うことはない。／英語は話せるようである。だが、英語の教え方はいい加減であると言おうか、方法が欠けている。〔……〕／教養はあるが、もったいぶった精神、詩と理想のことをよく語るが、一般的な事柄に対しては平凡な敬意を表明している。」(88)

ここに描かれているのは、既に三年の教育経験を持ちながら、視学官や大学区長の忠告に学んで、熱意と献身をもって自己を教員として育成する努力を怠り、ただいたずらに生徒達に対して怒りを爆発させるだけの、箸にも棒にもかからない教員の姿である。しかも、その背後には、「詩と理想」に心を奪われ、非礼にも理解可能性を拒絶した言語を語り（「偽りの独創性」）、教職の義務を平然と軽視している（「一般的な事柄には平凡な敬意を表明している」）、鼻持ちならない（「もったいぶった精神」）青年の姿が窺われる。明らかに、かつての好意は今や敵意と反発に転換したのである。だが、この転換を動機付けているのは、単にマラルメの教員としての自己形成の不十分さだけではない。非難は、彼の人となりにも及んでいる。つまり、彼は、教員としても人物としても、国家が彼の将来に対して抱いていた期待を裏切ったのである。検閲の言葉は、暗黙の内にこの裏切りの所在を語っている。この教員の詩篇が詩人——異なる言語を語る者、エクリチュールを実践する者——の存在を突然露わにした時、国家は、この教員に対する期待が裏切られたことを、従ってより正確に言えば、詩人を教員と誤認していたことを、はっきりと看取したのである。

従って、この時には明らかに[・][・][・]教職の外[・][・][・]でしか語られなかった詩人の言語が、それにもかかわらず指弾されねばならなかった理由は、今や明白である。スキャンダルの本質は、まさしく、詩人の存在がこの誤認を暴露したことにある。だからこそ、それは、マラルメにとっても国家にとっても、危機だったのである。詩人の消失か（その場合には、教員という誤認は《真実》へと訂正される）、あるいは教職からの追放か（その場合には、教員という誤認はそのものとして清算される）という、（マラルメにとっては不可能な）二者択一を、彼は、詩人の存在の徹底した隠蔽によって、いや、むしろ詩人の排除によって、回避する。というのも、新たな赴任先を獲得するために文部大臣に宛てた書簡の中でだけでなく、トゥルノンからの追放を知らせる友人たち宛ての書簡の中でさえも、彼は事件の真相を決して打ち明けようとはしなかったからである⁽⁸³⁾。だが、この隠蔽一排除の身振りを受け入れることは、国家にとっては失策とはならない。なぜなら、この隠蔽一排除は、抑圧する審級としての国家の内在化を証明するものだからである。

次に検閲が詩人の存在を指摘するのは、マラルメがリセ・フォンタヌに移って数年後の1876年から、コレージュ・ロランへの転任（1885年）を命じられるまでの期間のことである。この時検閲が問題にしたのは、もはや教職の外で語られた詩人の言語そのものではなく、[・][・][・]教員の中で語っている詩人の言語であった。

1876年の視学官ランベールの所見「マラルメ氏は古典をよく勉強し、また文学的著作とも無縁ではないようである。〔……〕だが、英語を教えるなら氏は英語を研究すべきであったし、また完璧にそうしたとしても、生徒達にイギリス作家のテキストの代わりに彼なりの翻訳のテキストを与えたりすべきではなかった。」(69)

1878年の視学官シャスルの所見「堅固な知識よりは好奇心が勝っている。」(63)

1879年の視学官ランベールの所見「文学的その他の著作の中に、ステファヌもしくはエチエンヌ・マラルメ氏は英語の単語に関する書物を公刊した。この書物は、恐らく《英語》におけるガリシスムを償うためであろうが、英語趣味が蒔き散らされたフランス語で——それをしもフランス語と言うならだが——書かれている。〔……〕氏が英語を学び、教育者として自己を育成しなかったのは残念である。」(60)

1880年の視学官ランベールの所見「マラルメ氏がリセ・フォンタヌの英語教師である限りは、氏は英語を習得し、生徒達に英語の教科書として、『店にいるアルルカン』だの『ブンブン、コガネムシ』だのといった馬鹿げた歌やお伽話をフランス語で与えたりせず、また生徒達に英作文のテキストとして、次のような馬鹿げた戯言、《嘘つきめ、唾を飲み込め、嘘つきの唾は誰よりも多い、それは彼が真実を少しも言うまいとして口にしなければならぬ多くの言葉のためだ、彼の舌が、しばしば他人の悪口を言うために、蝮の舌のように二つに裂けていても、それは更に小さな破片に切られて、街中の犬共がそれを一切れずつ貰うだろう》を、口述しないことである。氏は、この種のテキストを工夫するために払っている労苦を、何かもっとまともなものに応用して、生徒達が自分の目にした単語をもって翻訳できるようにするわけにはいかないのだろうか。」(57)

1881年の視学官シャスルの所見「氏の公刊物と、氏が生徒達に与える練習（例えばフランス語の翻訳を通して英語の諺を見つける）は、見識よりは好奇心を示している。」(54)

1882年の校長ジラルの所見「教育のある教員だが、残念なことには氏においては想像力が支配している。」(51)

1884年の視学官レヴィの所見「マラルメ氏は進歩した、〔……〕まだ宿題の選択や、時にはこの言語の諸原則の提示の仕方にさえ、以前にこの教員に対して非難が

なされた——そしてその非難は理由のないものではなかったのだが——あの奇矯さの痕跡がある。」(46)

1885年の視学官シャスルの所見「氏の授業に関しては、マラルメ氏が、微妙で疑わしい語源を与えるという氏の奇抜な想像力の誘惑により一層抵抗しているという意味では、進歩したように思われた。〔……〕」(43)

非公式の回路の第二の矛盾がもっとも尖鋭化するのここでのことである。マラルメの教員としての履歴においてもっとも難行した幾つかの運動——セニヨボスと中等教育局長ムーリエとが争った1878年の昇給、セニヨボス、ルージョン、グラズィアーニが完敗を喫した1879年の中等教育局長ズヴォールとの交渉、それ以後1884年まで続いた5000フランの年俸を廻る駆け引きと、この俸給と引換に決定された1884年のマラルメのリセ・ジャンソン＝ド＝サイイへの転任——は、全てこの時期に集中している。ここで検閲が摘発しているものを理解するためには、1876年から1885年というこの時期が、マラルメが独自の英語教材や教科書を次々に計画、執筆していた時期を完全に含んでいることを想起する必要がある——『英語の単語』(1877年公刊)、『英語の美』(「チャーサーからテニスンまで、ベーコンからカーライルまでを含む」英文学アンソロジー⁽⁸⁴⁾、1878年初頭に執筆、未完)、『英作文集』(未刊、1879年に書店に原稿が渡されている)、『古代の神々』(1880年公刊)、『《ナーサリー・ライムズ》集成』(未完、執筆は推定1881年)。第一章で指摘したように、上に挙げた全ての検閲の言葉は、教員マラルメの授業が何らかの形でこれらの著作を反映していたことを確認させるものであるが、そこで共通して批判されているのは、教育の中にそれとは異質なものが忍び込んでいる、ということである。この教員の精神は奇抜であり、彼が生徒達に語る事柄には、「奇矯さ」、「好奇心」、「想像力」が認められ、教材や教育方法は「馬鹿げて」いるように見え、また彼が公刊した教育図書は、純粋な英語でも純粋なフランス語でもない、奇形で雑種的な言語で書かれているのである。この教員とその授業とが持つ胡散臭く、まともではない性格は偏にそこに起因している。検閲が見出したのは、教員のものならざる言語、かつてトゥルノンにおいて排斥されたのと同じあの詩人の言語が、しかし今度はまさしく教壇で、教員の言語の中で、教員の言語を装って語られている、という異常事態なのである。従って、ここに認められるのは、抑圧されたものが妥協や歪曲という手段を取って回帰するメカニズムである。詩人は、教員と住み分けて、教職の外に自らの言語を疎外することにはもはや甘んじず、手を変え品を変えて教員の言語に侵入している。検閲が摘発しているのは、まさしく、

こうして教員の中に回帰した詩人の存在なのである。

だが、なぜとりわけこの時期に、詩人の回帰が顕著になったのだろうか。1876年から1885年までの10年間は、詩人マラルメの生涯における特異な中間地帯を構成していると言うことができる。この時期以前に存在していたのは、『第一次現代高踏詩集』（1866年）でデビューし、『第二次現代高踏詩集』（1871年）に投稿された《詩篇エロディアード——古い戯曲形式の習作の断片》や、とりわけ『牧神の午後』（1876年）によって、一部の詩人たちの間に高い評価を得ていた「詩人マラルメ」であり、この時期以後に存在することになるのは、新しい詩の流派の領袖と目されて、文学ジャーナリズムに健筆をふるう「詩人マラルメ」である。実際、この時期の両端に、各々の「詩人」の作品が位置している、すなわち、1876年には『牧神の午後』と『ヴァテック』、1885年には《リヒャルト・ワグナー——あるフランス詩人の夢想》（雑誌『ワグナー評論』8月2日号）と《白睡蓮》（雑誌『l'Art et la Mode』8月22日号）である。だが、間に挟まれた10年は、「詩人」の沈黙の時期である。この沈黙を、二つの作業が埋めていた。一つは、きわめて謎めいた「演劇」の計画——というのも、マラルメは書簡の中で繰り返しこの計画に言及しながらも、その具体的詳細を明らかにすることは決してなかったからである⁽⁸⁵⁾——、そしてもう一つは、先にも述べた英語関係教育図書計画・執筆である。前者の計画は、1885年11月16日付けヴェルレーヌ宛てのいわゆる「自伝書簡」において初めて公にされた「書物」の構想へと発展し⁽⁸⁶⁾、晩年に至るまで追及されたと想定しうるが、今日残されている「書物」の草稿⁽⁸⁷⁾は、あたかも思考の星雲がその時々取る瞬間的な形をそのままとどめたかのような、解読困難な形式を取っているので、ここでそれについて論ずる余裕はない。だが、確実に言いうることは、明白に意図的な「詩人」の沈黙の中で、マラルメは、「書物」の萌芽状態もしくはその前段階と見做しうるこの「演劇」の計画に、彼の詩人としての新生を賭していたということである——「私がこの広大な演劇の仕事を立てるためには、絶対的な孤独が必要です、更には私が三つの戯曲を手にして、絶対に未知の、つまり新しい人間として、再び現れるためには、この地で一年か二年の間私を忘れさせる必要すらあります」⁽⁸⁸⁾。言い換えれば、「黙した白蟻のように」⁽⁸⁹⁾詩人が十年にわたって追求し続けたのは、詩人の新たな言語であり、その言語を可能にする新たな装置としての「演劇」ないしは「書物」だったのである。この「書物」は、匿名なもの、非人称的なものであらねばならなかった——「私の個人的な仕事の方は、匿名なものとなるでしょう、そこではテキストが作者の声なしに自分自身について語るからです」⁽⁹⁰⁾。テキストのこの「匿名性」、「非人称性」を現実的に保証するものは、

明らかに「演劇」ないしは「書物」という装置の機構である。従って、マラルメが生涯を賭けた「書物」の構想においてもっとも心血を注いだのは、この機構の青写真を作り出すことであった。だが、平行してマラルメは、この「匿名性」、「非人称性」の理論的根拠を、言語それ自体についての哲学的知見に求めていたように思われる。なぜなら、この詩人にとって、言語こそは、人間の全ての言語（活動）がそこから生み出され、そこに帰っていく永遠の源だからである。従って、人間の言語（活動）において真に語っているのは、彼の個人性（私）ではなく、言語それ自体である。少なくともこれが、「書物」の「匿名性」を正当化する理論的基盤を構成する観念であったように思われる⁽⁹¹⁾。『英語の単語』を始めとするマラルメの一連の英語教科書は、英語という一言語を例に取って、そのことを照らし出そうとする試みであった。実際にはいささかも教育的でも科学的でもないこれらの《教育図書》において、マラルメが行っているのは、きわめて慎ましい詩人の仕事——英語それ自体を、一つの潜在的文学として、一切の文学的可能性の母胎となる広大で匿名な創造力として、捉え、分析すること——に他ならない。だからこそ、マラルメは、『英語の単語』序論第二章《沿革》では、英語の祖である低地ドイツ語最古の文献、モエソ＝ゴート語で書かれたウルフィラスの『福音書』から、同時代のポーヤホイットマンに至る詩人・作家の言語を、個人の言語としてではなく、単に、英語の形成の各段階における言語見本としてのみ位置づけるのである。従って、「詩人」の沈黙を満たしていたもう一つの仕事である英語関係教育図書の計画・執筆を、詩人の新たな言語とその装置の探究という関心の派生物として捉え返す必要があるだろう。ところで、これらの教育図書は、教員の授業にまで反映していた。つまり、詩人の言語を教員の言語の中へと回帰させたのは、まさしくこの関心それ自体だったのである。

検閲が詩人の存在を指摘する最後の事例は、1885年から1893年に至る教員マラルメのコレージュ・ロラン時代に属している。だが、この時検閲が問題にしたものを正確に言うなら、それは詩人の存在ではなく、むしろ教員の不在であった。

1886年の学長ロゲの所見「マラルメ氏は大変温和な性格で、大変思いやりのある人物であるが、活動的ではない。氏のクラスは眠っている。生徒たちはノートもなく、全然筆記をしない。教師は添削した答案を返さない。従って氏のクラスは関心と活気を欠き、進歩は遅い。」(40)

1887年の視学官シャスルの所見「マラルメ氏が大変育ちのよい、エスプリに富んだ人物でしかないことは残念である。氏は、教職の責務には、つまり何事をであれ

教えるという義務には、天性異質なのである。氏が求めているのは、可能なこと、新しいこと、新奇なことでありうるような事柄である。ロランでは、職務を果たしていながら、実は果たしていないこの新任教員に幾分困惑している。」(38)

1888年の学長ロゲの所見「マラルメ氏は大変温和で、大変思いやりのある、だが弱々しく活気のない性格である。秩序と沈黙を獲得するのに大変な苦勞をしている。氏の健康は非常に悪く、かなりしばしば氏を家に引き止める。〔……〕」(36)

1889年の視学官シャスルの所見「マラルメ氏は、教育にも規律にもいささかも適していないように見える文学的な、余りにも文学的な精神の繊細さゆえに、様々な赴任先で遺憾な印象を残してきた。ロランでは、私は氏からより単純でより明白な方法を獲得するよう努めた。氏は大変懇懇に私のこうした考察に従った。お喋りする代わりに、氏は教育した。黒板を今までよりうまく用いた。おそらくこのような教授法の進歩においても、氏は幾分上の空であったかもしれない。氏がその繊細な性質を決定的方法と組み合わせるに至ることを期待する。」(32)

1890年の学長ルスロの所見「幼いクラスの英語教育を担当しているこの教員は、生徒達に及ぼす活動に、より多くのエネルギーと連続性を示すべきであった。〔……〕」(28)

1893年の視学官ボセールの所見「穏やかで温和な人物、足取りはゆるやか、仕種は控え目。こんなことでは子供達のクラスは維持していけない。従って、大したことはできない。生徒は黒板に書かれた短い文章をルーズリーフに書き写すという同じ繰り返しを殆ど出していない。宿題に何らかの一貫性があるように、ノートと、せめて基礎的なものであっても簡単な教科書とを持たせるよう要請した。」⁽⁹²⁾

視学官シャスルの「お喋りする代わりに、氏は教育した」という所見の文言が、逆に、検閲にとっての問題の所在をはっきり示している。この教員は、教壇に立ってはいても、授業をしていない。彼が口を開くのは、教育するためではなく、お喋りするためである。教室には沈黙も秩序もないが、そんなことは構わない、彼の心はそこにはないからである。そればかりか、往々にしてこの教員は教室から文字通り不在になった——多くの、だが散発的な欠勤を除いても、1890年度には4月から年度末まで、1891年度には年間を通じて週16時間の内6時間、1893年度には勤続30年を満了する日まで、健康上の理由が彼を家に引き止めたからである。

無気力——教職の義務に対する熱意と献身の完全な喪失——の原因は、こうして多

くの場合、この教員の健康状態に求められている。だが、それにも劣らないもう一つの理由は、おそらく彼が、その資格と地位からして享受しうる俸給の最高額を既に獲得し、後はただ退職年金権の享受を許す勤続30年の期間満了を待つだけの状態にあったということであろう。国家もおそらくそれを待っていたものと思われる。なぜなら、この教員が退職を願い出た時、学長も副大学区長も文部大臣もそれを好意的に受け入れたからである⁽⁹³⁾。

従ってここでは、教職は、過去の二つの事例とは全く異なる形で脅かされている。詩人の言語は教職の外にあるのでも、教員の中に忍び込んでその言語を変質させるのでもない。逆にここでは、教職の方が疎外されている、その結果、教壇では、教員の言語が「生徒たちの能力の範囲を越えた微妙なお喋り」(34)へと漂流していくのが見られるのである。だが奇妙なことに、詩人の存在がこれ程に教員を不在にしているにもかかわらず、検閲の言葉に感じられるのは、これまでのような冷やかな敵意、意地悪い皮肉、あからさまな侮蔑、あるいは激しい非難ではなく、むしろ困惑である。例えば、学長ロゲは、マラルメがロランに赴任して二年目の「極秘報告」に、「マラルメ氏を教授資格者に代える余地がある」(37)と、暗にこの教員の追放を促す提言を行うが、それが副大学区長グレアールによって斥けられて後は、毎年この教員に対して「温和で思いやりのある、だが無気力な教員」という千遍一律たる愚痴をこぼすのみで、もはや同じ提言を行おうとはしないのである。その主たる理由は、おそらく、この人物の教職外的地位の変化に求められるであろう。1883年に雑誌『リュテース』に連載されたヴェルレーヌの評論『呪われた詩人たち』(1884年4月単行本刊行)と、ユイスマンスの小説『逆しまに』(1884年5月公刊)は、「詩人」マラルメの名を一気に知れ渡らせた。マラルメが文学ジャーナリズムに文名を馳せ、若い詩人達から師と仰がれるようになったのは、この時からである。検閲の言葉は、教職の外で展開されているこの状況の変化を反映している。例えば、これより先、1878年に、リセ・フォンタヌ校長ルグランは、この同じ教員の文学的交遊について、「その習慣と交遊関係から、芸術家にして詩人(世の理解を得られない人々の部類の)であるという口実の下で、氏は教職の定まった真剣な態度を少し外れているように、常に私には見受けられた」(62)と報告していた。ところが、1890年の総視学の際の視学官ボセールの見解は、同じ問題についてこう語っている。

「ステファヌ・マラルメ氏は、その性質の善良さと性格の鷹揚さとのために、デカダン派の詩人達のグループでは評価されているそうである。氏には、実際、卓越し

た人物らしい様子がある。品行は大変優れたものである。」(30)

また、学長ルスロが、「マラルメ氏の疾病は教育による疲労から引き起こされたものと見られ、いずれにせよ病状は氏の職務の遂行において悪化していくことを証明」(21)して——これは言い換えれば、検閲自体が、教員と「詩人」の共存の不可能性を認めて、教員よりは「詩人」に優先権を与えたということである——、マラルメの退職を正式に支持したその同じ日に、文部大臣レイモン・ポアンカレはこの教員に、文人年金が授与されることを通達する。文壇及び文学ジャーナリズムが生み出した「巨匠マラルメ」という誤認が、検閲の言葉のこうした変化を促すに大いに与かっていたことは確かであろう。従って、正確に言えば、ここで検閲が不在な教員の中に見ていたのは、「詩人」の像なのである。詩人の存在は、この場合に限り（あるいは漸くにして、と言うべきか）、「詩人」というもう一つの誤認によって見事に隠蔽されたのである。

5. 国家と詩人

簡略に言えば、フランス国家とマラルメとの関係は、自らを詩人（エクリチュールの実践主体）と見做していたこの人物を、国家が、まずは教員として抑圧した後、最終的には、社会的に認められる詩篇の作者という意味での「詩人」として認知するという過程を辿っている。とはいえ、これは決してハッピー・エンドではない。マラルメに対する国家の認識が教員から「詩人」へと修正されたのは、彼の文壇及び文学ジャーナリズムでの地位の向上という、詩人にとっては全く非関与的な要因の結果である以上、それは誤認の単なる置き換えに過ぎないからである。国家は、そのものとしての詩人の存在を承認したのではなく、単に、詩人を「詩人」として知的に受容したのである。従って、まさしくフロイトが述べているように、抑圧の本質的なもの（そのものとしての詩人の存在の抑圧）は依然として存続しているのである。

しかも、マラルメが国家に向けて発話した公式・非公式の様々な言葉の分析は、このような誤認が実際にはマラルメ自身によって積極的に助長されていたことを明らかにしている。従って、詩人を抑圧しているのは、単に外在的なそのものとしての国家であるだけでなく、むしろ、まずはマラルメによって内在化された抑圧する審級としての国家であると言うべきであろう。マラルメが国家に対して積極的に産出し続けた様々な誤認は、内在化された国家に対する自己同一化が成立する同数の極となって

いるのである。こうして、正確には、詩人の抑圧は二重の関係に従っている。第一に、外在的なそのものとしての国家によるマラルメという人物の抑圧がある（抑圧1）。だが第二に、既にこの人物の内面で、内在化された国家への自己同一化が、それに背くものとしての詩人を抑圧しているのである（抑圧2）。後者は、非公式の言葉の回路の本質的矛盾を構成するものであり、前者は、この本質的矛盾が露呈した時に、言い換えれば、詩人の抑圧をマラルメという人物の内面でのみ処理することが不可能になった時に、非公式の言葉の回路と検閲結果との矛盾という形をとって顕在化するものである。このような観点では、国家による詩人の抑圧は、抑圧2の作動（誤認の産出）→抑圧2の失敗（詩人の回帰）→抑圧1の作動（検閲による詩人の存在の摘発）→抑圧2の作動（既にある誤認の補強および／あるいは新たな誤認の産出）→抑圧2の失敗……という循環を繰り返した末、抑圧2の安定した作動（「詩人」という最終的誤認の産出）による抑圧1の変形（詩人の知的受容）に到達するという過程を辿っている。

ところで、奇妙なことだが、抑圧そのものは、この過程の第一段階（詩人の文字通りの抑圧）では、まだきわめて不安定で危機的な状態にある。抑圧2が次々に産出する誤認は、それ自体では詩人の回帰を妨げるだけの力を持たない脆弱なものでしかない。これらの誤認は、正確には、詩人の存在の否定が単に変形されたものでしかない。詩人が回帰するや、一気に虚偽に転落してしまう危険にさらされることになるのである。従って、虚偽に再び真実らしさを纏わせ、誤認を再建するためには、常に外的な圧力（抑圧1の作動）が必要になる。内在化された国家は、絶えず外在的な国家によって裏打ちされねばならないのである。従って、ここではまだ、国家との十分な自己同一化が確立されているとは言い難い。これに対して、第二段階（詩人の知的受容）においては、抑圧は完全な成功をおさめている。というのも、「詩人」という堅固な誤認の産出によって、国家との安定した自己同一化がなし遂げられた結果、いかなる詩人の回帰もこの誤認の中に搦め取ることのできる態勢が確立されたからである。従って、国家による詩人の抑圧の過程は、裏返せば、詩人の国家に対するより安定した自己同一化が成し遂げられていく過程でもあった、ということになる。

こうして、マラルメという一人の詩人とフランス国家との間には、抑圧＝誤認＝自己同一化という関係が成立していたことが結論される。最後になすべきことは、この関係の二つの項——国家と詩人——のいかなる特定の布置がこの関係を決定しているのかを考えることである。

前章に引用したルージュンのマラルメ批判（「思考の大地を音の楽園から隔てるあ

のきわめて見分けがたい境界に危険なくらい接近している」)がよく語っているように、詩人マラルメが実践しようとしていたエクリチュールは、音と意味との境界に可能な限り接近することによって、言語活動の理解可能性(思考・意味)を犠牲にしてまでも、音楽と文芸とを統合しようとするものである。だが、これは重要なことなのだが、このエクリチュールは、この境界に「危険なくらい」接近しはするが、決してそれを乗り越えて、「音の楽園」に移行してしまうわけではない(その時には、それはエクリチュールであることを自ら放棄してしまうことになるだろう)。言い換えれば、このエクリチュールは、言語の枠を決して乗り越えはしないが、同時に、言語にそれが語りうることの全てを語らせようとする。それは言語自体の言語能力を最大限に発揮させるような言語運用となるのである。従って、このようなエクリチュールを実践する詩人は、シニフィアン/シニフィエのバーを侵犯すると同時に維持し、言語活動の理解可能性を犠牲に供しつつ同時に尊重してもいる。彼が行うのは、二重の侵犯行為であると同時に、これらの侵犯行為の抑制なのである。従って、詩人とは、それ自体矛盾の場である。そこでは、意味作用的統一とこの統一の破壊とが、鋸を削っているのである。

これに対して、このような意味での詩人にとって抑圧する審級となる国家は、論然として、詩人が侵犯する境界を維持し、統一とそれがもたらす秩序とを支える超越的な法の場合である、と定義することができる。言い換えれば、国家とは、統一の特権化された審級であり、統一を支えると同時に、統一によって支えられてもいるものなのである。詩人は、彼を構成している矛盾の一方の項——意味作用的統一——によってこの審級と結びついているが、他方では、この統一の侵犯行為によってそれを激しく攻撃してもいる。従って、国家が詩人を抑圧する時要請しているのは、彼を構成しているこの矛盾を清算し、侵犯行為を排除した統一が再建されることなのである。『牧神の午後』を批判する校長ルグランの言葉は、また『英語の単語』を批判する総視学官ランペールの言葉は、この要請をよく表現している。

とはいえ、「民主主義的」国家は、必ずしも、ギリシャの哲学者が夢想したように、矛盾の場としての詩人を統一から排除しようとするわけではない。「民主主義」とは、統一の外延を最大限拡大し、できる限り多くの主体をこの統一の枠内に囲い込もうと図るシステムだからである。このことを明証する二つの事例がある。一つは、個々の主体と政治的・経済的統一との間に直接的な代表—被代表関係を打ち立てるものとしての、普通選挙と信用経済システム(「動産の普通選挙」⁹⁴⁾)であり、もう一つは、この代表—被代表関係が個々の主体に押しつけている、統一の審級の内在化である。な

ぜなら、政治的・経済的普通選挙においては、それに参画する全ての主体は、自らの代表として選択した統一に対して自己を（例えその有限な一部に過ぎなくとも）委ねることに同意するからである。この同意によって、統一の審級は主体に同化されるのである。要するに、民主主義的国家とは、限りなくその外延を拡大して肥大していく統一なのである。従って、このような統一は、いかなる主体に対しても、統一内部に何らかの位置を与えようとする。そのような位置の一つが、詩人という矛盾の場に対して与えられる「詩人」という誤認である。確かに、この誤認によって、詩人という矛盾の場は一つの社会的自己同一性を獲得する。だが、その時同時に、詩人の存在は統一の共犯者となる。なぜなら、彼は以後、統一が実現され、維持されるためには、必然的に除去され、抑圧されねばならない矛盾と侵犯行為とを、《芸術》の中へと昇華しつつ吸収することによって、統一の安定と延命を保証するという機能を委託されることになるからである。言わば、詩人という矛盾の場は、統一にとって異質な他者が囲い込まれ、無害なものへと中和される場に歪曲されるのである。統一の絶対的外部であった詩人は、こうして統一の内部にある外部として認知される。矛盾の場としての詩人は、国家が受容する「詩人」の中に、自己のグロテスクな鏡像を見出すことになるのである。

この鏡像にナルシズム的に固着することのできる詩人は幸福である。なぜなら、彼は自己を構成している矛盾を知らずにいることができるからである。他方、詩人がこの鏡像を拒んで、自らをあくまでも矛盾の場として維持していこうとするなら、彼は統一の埒外に追放され、従って、彼を構成している当の矛盾の直中に崩壊していかざるをえない。ロートレアモン、ランボー、ヴィリエ＝ド＝リラダン、あるいはアルトーといった詩人の辿った運命は、それを証明している。これに対して、マラルメは、矛盾の場を社会的統一の内部で維持するという第三の方向を選択している。内在化された国家に対する——まずは教員、後には「詩人」という——自己同一化は、その不可欠な手段だったのである。だが、そうすることによって、統一と矛盾の場との葛藤は、実際には、統一する審級への自己同一化と、それに背く詩人の存在という、彼の語る主体を構成している二つの位相の間のより先鋭な葛藤へと転位されたのである。詩人マラルメのテキストは、この葛藤を様々な形で言語化している。例えば、この葛藤を詩人の側から一気に暴力的に解決してしまおうとする誘惑の意味論化としての《自殺》、あるいは同じ解決の試みのより洗練された形式としての、音韻的・意味論的な多元決定の下に置かれたエクリチュール、あるいは統一から排除されたものを統一内部に呼び入れるための不可避的妥協としてのフェティッシュ化（女性、ファッション

ン、宝石、〔貨幣の排除された裏面としての〕黄金、要するにあらゆる豪華な無)、そして、とりわけ詩人という矛盾の場をその誤認である「詩人」——「巨匠マラルメ」の、あるいは「詩王マラルメ」の《栄光》——から密かに切り離す働きをするイロニー⁽⁹⁵⁾ (だが、そこにはまた、国家という特権的な統一の審級が支配している社会においては、ついにそのものとしては存在の場を得るに至らない詩人の、苦い自嘲も込められていることを忘れるわけにはいかないだろう⁽⁹⁶⁾)。これらは全て、密かに仕掛けられた爆薬となって、「詩人」という誤認=自己同一性を内部から粉碎する(ちょうど、詩人の言語が教員の言語を様々な形で内側から変質させていたように)。しかし、それにもかかわらず空虚な内実を抱えたこの誤認は存続し、詩人の存在を保護しながらも、同時に隠蔽し、抑圧するのである。

6. プロクルステスの寝台——結びに代えて

ギリシャのある神話は、旅人を寝台に寝かせては、足らざるを引き延ばし、余るを切り落とした山賊の話を伝えている。全ての主体に対して自らとの自己同一化を迫る統一の審級とは、まことにこの恐るべき山賊の寝台のごときのものであると言えるだろう。しかも、国家にその特権的形象を見出しているこの統一の審級は、様々な社会集団の中にもまた、多様な形象を纏って偏在しているのである。従って、マラルメに典型的に認められる国家と詩人との関係は、決してこの詩人に特有なものだったわけではなく、これらの統一の審級と個々の主体との関係にもまた見出されるはずのものである。確かに、主体が語る主体となるためには、何らかの形で統一の審級との自己同一化が不可欠である。そして、自己同一化とは誤認である以上、主体をその中へと疎外していくものであるということもまた確かである。ラカンが述べているように、この疎外は人間の存在論的宿命であると言うことができるかもしれない⁽⁹⁷⁾。反対に、クリステヴァが試みているように、誤認=自己同一化による主体の疎外は、統一の審級と矛盾の場とのある特定の関係——統一の審級の特権的現れとなるような諸社会集団(国家、家族等々)の助長・強化、及びそれに対する強制的自己同一化——に基づいていると考えること⁽⁹⁸⁾は、統一の審級と矛盾の場の間(国家と詩人の間)の全く別の(可能的な)関係を模索する方向性を開く。マラルメは、統一の審級に対するこの二つの観点の間を揺れ動いているように思われる。なぜなら、一方で、この自己同一化が拷問の寝台とは異なる形態を取ることでもできると、従って「人がまさしく居るべきところに居る」ことができると信ずることは、自嘲の対象となっているからであ

る。それは、宿命に異議を唱えることである以上、「決して来ないかもしれない時代」に属する可能性なのである。従って、詩人は宿命に甘んじ、誤認を受け入れて、温和で優美で愛想のいい「詩人」もしくは詩作する教員として、「名刺代わりのスタンスやソネを時々は生きている人々に送」り続ける（「彼等から石で打ち殺されないうために」）。だが、他方で、それでもなお詩人は、この可能性を「視野に置く」ことをやめることができない（たとえそのために「到来しないメシアの予言者」と呼ばれることになったとしても⁹⁹⁾）。なぜなら、それこそが詩人の——従って決して「詩人」の、ではない——自己の時代に対する唯一の義務だからである。こうして、詩人のエクリチュールは、自己同一性の中に矛盾の場を取り込むことによって、この自己同一性に密かな裂け目を入れ続ける。それは、所与のいかなる社会もいまだかつて実現してはいないこの可能性を、未来に向けて提示するためなのである。

注

80. ルフェビュールがマラルメに宛てた 1866 年 10 月 14 日付け書簡「あそこ〔トゥルノン〕は全くもって、ライオンではなく驢馬がうようよしている穴です」(Henri Mondor, *Eugène Lefébure — sa vie, ses Lettres à Mallarmé —* Gallimard, 1951, p. 229), また同年 11 月 1 日付け書簡「〔ブザンソンへの〕任命を喜んでいます。〔……〕今だから言えることなのですが、あなたがこれ以上長くトゥルノンにとどまることを心配しておりました。この前のあなたの手紙に私は心を痛めていたのです、とりわけ例の副知事、詩人を教師にしているというので、息子を学校から引き取ると脅している、あの不愉快な気障野郎の反感を買ったことで」(Ibid., p. 230) は、マラルメが事件をどのような理解に基づいて報告していたかを伺わせる。詩人と大衆との対立というトポスは、まだ、マラルメが友人たちと共有しているものであった。このトポスについては、マラルメ、『芸術の異端——万人のための芸術』(O. C., pp. 257-260) を参照のこと。
81. Gabriel Faure, *Mallarmé à Tournon*, Editions des Horizons de France, Paris, 1946, p. 119 を参照のこと。
82. Henry Roujon, *op. cit.*, pp. 45-46.
83. マラルメは 7 月 16 日付け文部大臣宛て書簡において正式に転任の申請を行い (150), また既に新学期が始まっていた 10 月 8 日には改めてエクス大学区長に宛てて、直接大臣に面会して転任を申請するために任地を離れる許可を申請している (152)。いずれの書面でも、転任を必要とする理由として強調されているのは、トゥルノンの気候が健康に及ぼす悪影響である。後者では、これに休職がもたらす経済的苦境が付け加えられている。他方、大学区長がついに文部省に事件の真相を打ち明けた 10 月 9 日付け書簡 (153) には、日付、宛先、差し出し人の名前等が一切書かれていないばかりか、周囲を黒枠で囲んだ便箋が用いられていること、また筆跡がマラルメのそれとは全く異なる震えた読みにくいものであることなど、疑問をそそる点の多い一通の書簡 (154) が同封されている。(ジルは、これをマラルメ自身のものと推測して、筆跡の違いについては、故意に筆跡を変えたか、あるいは極度の精神的動揺の結果筆跡に乱れが生じたものと説明している(M. F., pp. 11-12)。) この書簡の筆者

が誰であるにせよ、明らかにその人物はマラルメの意を体して語っている。筆者は、この教員の健康問題をとりわけ強調し、更に、未亡人である祖母に対するこの教員の情愛を暗示しながら、マラルメがもっとも強く希望していたサンスを、転任地の第一候補として推薦しているからである。従って、マラルメは、事件の真相が既に暴露されているにもかかわらず、文部省に対しては、あたかもスキャンダルなど起こらなかったかのように、詩人は全く存在していないかのように、振る舞っているのである。

同様に彼は友人達に対しても、新しい赴任先が見つかるまでは、転任を迫られている真の理由を秘匿していた。例えば、1866年7月16日付けオーバネル宛て書簡「もうトゥルノンでは私を必要としていない。校長は、英語教師とドイツ語教師を、ある多言語併用教師で代用したがつている。私はこの節約の犠牲になったのだ」(Corr., p. 223)、同年12月5日付けフランソワ・コベ宛て書簡「これから何日かしたら、どういふわけで私がトゥルノンを去らねばならなかったかをあなたにお知らせしましょう」(Ibid., p. 233)。スキャンダルと重なる時期にマラルメ宅に滞在したルフェビュールは、マラルメが転任を迫られていることを知っていたようであるが、注80に引用した二通の書簡の日付が語っているように、その真の理由を知らせる「この前の手紙」を受け取ったのは、10月後半になってからである。マラルメの転任先を探して奔走したデ・ゼサルに至っては、真相をルフェビュールから聞かされている(同年12月22日付けマラルメ宛て書簡, *Vie de Mallarmé*, p. 228を参照のこと)。マラルメは新たな赴任先を獲得するために、継母を始めとする親族、ルノー、カザリス、デ・ゼサル等多くの友人・知人にあらゆるつてをたどって運動してもらっていた。おそらくこれらの運動の妨げになることを恐れて、彼は友人たちに対しても真相を隠したのである。

84. 1878年2月5日付けジョン・イングラム宛て書簡 (Corr., II. pp. 162-163)。
85. *Ibid.*, pp. 101, 108, 143, 150, 154, 158, 193, 248, 219, 272 et 294 を参照のこと。また、1879年のズヴォールとの交渉について報告しているマラルメ宛て書簡の中でルージュンが言及している「あなたが生涯を捧げている作品」も、この計画を指しているものと思われる。
86. このいわゆる「自伝書簡」は、ヴェルレーヌが『現代人士録 [*Les Hommes d'Aujourd'hui*]』中のマラルメの項目執筆の参考資料として求めたものである。これに先立つ1883年末、やはりヴェルレーヌから『呪われた詩人たち』のために未公開の新しい詩句を求められたマラルメは、11月3日付け書簡で、「準備すべき個人的作品」、「かつて試みられた最大の文学的作業の一つ」に専心していることを理由にして、古い詩句しか送れないことをことわっている。この「個人的作品」は演劇ではなく、散文であると言われている——「散文で書かれる私の作品の骨組みに専念しています」(*Ibid.*, II. p. 248)。だが、演劇の計画は1885年9月10日付けエドゥアール・デュジャルダン宛て書簡でも、まだ話題になっている——「私が夢見ているような〈ドラマ〉の研究、というのも出来上がったものを見せることによってしか語れないからです。私はそれを粗描しています。これが今年の冬の私の貧弱で稀にしかない自由な時間の恐ろしい仕事になることでしょう」(*Ibid.*, II. p. 294)。従って、《書物》は、演劇と散文との間を揺れ動いたこの計画に最終的に与えられた名称=機構であったように思われる。
87. この草稿は、《書物》の計画に関する研究と共に、シェレールによって公刊されている。Jacques Schérer, *Le "Livre" de Mallarmé*, Gallimard, 1957, nouvelle édition, 1977.
88. 1877年5月18及び28日付けサラ・ヘレン・ホイットマン宛て書簡, Corr., II. p. 151.
89. 1882年10月9日付けジョン・ペイン宛て書簡, *Ibid.*, p. 232.
90. O. C., p. 663.
91. 「可能なあらゆる言説を、語の束の厚みのなかに、白紙の上にインクで書かれるあの厚み

のない物的な黒い線のなかに、閉じこめようとするマラルメの企ては、事実上、ニーチェが哲学にたいして解決を命じた問い掛けに答えるものだ。〔……〕だれが語るのか？ というこのニーチェの問にたいして、マラルメは、語るのは、その孤独、その束の間のおののき、その無のなかにおける語そのもの——語の意味ではなく、その謎めいた心もとない存在だ、と述べることによって答え、みずからの答えを繰り返すことを止めようとはしない。〔……〕マラルメは、言説がそれ自体で綴られていくような〈書物〉の純粋な儀式のなかに、執行者としてしかもはや姿をみせようとは望まぬほど、おのれ固有の言語から自分自身をたえず抹殺しつづけたのである。〕(ミシェル・フーコー、『言葉と物』、渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974年、324—325頁)

92. M. F., p. 280.

93. 1892年7月28日付け文部大臣宛て書簡で正式に退職を申請するに先立って、マラルメは同年度の「個人履歴書」に退職を希望する旨を記している。学長は、それを支持する次のような提言を書き添えている——「この講師はかなり退職に有利でありましょう。まだ51歳にしかありませんが、来る11月3日で勤続30年を数えます。政府は氏が退職を得る手段を容易にしてやることができましょう」(Ibid., pp. 280—281)。学長の提言に同意した副大学区長は、マラルメの退職申請を送付するにあたって、次のように提言している——「コレージュ・ロランの英語講師マラルメ氏は〔……〕次のように懇請致しております。/1) 氏が30年の公的職務を数えることになる日である来る11月1日までの俸給付き休職。/2) この日を限りとした氏の退職。氏は51歳です。/他方、学長殿は私に、休職中の俸給はコレージュの予算より天引きできると伝えてきております。/大臣閣下、マラルメ氏の願いを御受け入れ下さいますよう御願ひ申し上げます。そればかりか、氏の願いは閣下御自身の御意図とも一致するものでございます」(93)

94. 河野健二、『第二帝政とブルジョワ化の完成』、河野健二編『フランス・ブルジョワ社会の成立』、岩波書店、1977年、25頁。(なお「動産の普通選挙」という表現は、Girard, *La politique des travaux publics du Second Empire*, 1952, p. 9よりの河野氏による引用である。)

95. マラルメにおいては、詩人と「詩人」とのずれはきわめて顕著である。『第一次現代高踏詩集』によって「詩人」としてデビューした時、詩人は既に『エロディアド』の序曲に着手していた——「私は音楽的な序曲を書いた、まだ殆ど粗拙状態だが、思い上がりでなしに、いまだかつてない効果を持つと、君が知っていた演劇仕立ての場面〔《Scène》〕は、この詩句の傍らでは、レオナルド・ダ・ヴィンチの画布と比較したエピナルの通俗な版画でしかないと、言うことができる。この作品を完成するにはまだ三回か四回の冬が必要だろうが、ついにこれこそ〈詩篇〉だと夢想しているものを、——ポーに匹敵し、彼の詩篇も凌駕しないだろうものを——書き上げるのだ」(D. S. M., VI, p. 307)。他方、『現代高踏詩集』に発表された初期詩篇に関しては、彼は次のように語っている——「これらの詩篇のどれ一つとして、実際には、〈美〉を目指して考え出されたものではなく、むしろ私の気質とそれが生み出す調子との直観的開示として考え出されたものなのだ」(Ibid., p. 316)。このずれは、彼が「詩人」として公認された時にはもっと大きくなっている。ヴェルレーヌ宛ての「自伝書簡」において、詩人は彼が若い詩人たちに与えたと言われている影響を否定しながら、こう語っている——「親愛なるヴェルレーヌ、あなたの『呪われた詩人たち』とユイスマンスの『逆しまに』は、長い間訪れる人もなかった私の〈火曜会〉に(マラルメ主義者は別として)私達を愛する若い詩人たちの関心をひきつけました。私が何らかの影響を及ぼしたと思われたのですが、そこにあったのは出会いだけだったのです。きわめて鋭敏であった私は、十年も以前に、今日若い人々が立ち至っているはずの局面に達しておりました」(O. C., p. 664)。

また、《詩の危機》の冒頭では——「先程、何もする気にならないまま、毎日毎日午後になると鬱陶しい嫌な天気のでいで疲れ果てて、私は興味一つ持てず、というのも興味の方からすれば二十年も前に全てを読んでしまったような気分だからなのだが、彩り様々の真珠の縁飾りを再び下ろした。縁飾りは、まだ、書齋の仮閉じ本の玉虫色の光沢に、雨のような靨いをかけている。数多の著作は、カーテンの色ガラスの下に、その固有のきらめきを並べることだろう。私は、天候が熱したかのように、ガラスに身を凭せ掛けて、豪雨を告げる微かな稲光を追ってみたい。／我々がいる最近の段階は、閉塞しているとは言わないまでも、停止している、つまり自覚しているのだ。少しく注意を払えば、創造的で相対的に確実な意志が明らかになる。／新聞ですら、報道には二十年もの年月が必要なのに、突然、正確な日付で、この問題に関心を払っている。／文学は、ここに、微妙ではあるが根本的な危機をこうむっているのである」(O. C., p. 360)。この論文は背後の事情を考慮しないと理解しにくいかもしれないので、松室三郎氏の次の解説を引用しておく——「この節の初稿が書かれたのは1895年である。これより二十年前、第三次『現代高踏詩集』刊行に際してマラルメは、十年來推敲に推敲を重ねた名作『半獣神即興』を投稿したが、編集委員会は其の掲載を拒絶した。〔……〕この同じ詩華集に既に独特の詩風を示す作品を投じて、同じく掲載を拒まれたヴェルレーヌの場合とも相まって、この所謂「パルナス事件」を、後年マラルメは、象徴詩風の高踏派からの分離を示す出来事であった、と評している。この両先覚によって準備されていた新しい詩の運動が、1890年代に入ってジャーナリズムに騒がれるようになったのであるが、この二十年來のフランス詩の動向は、夙にマラルメの予見するところであった」(松室三郎、《詩の危機》訳注、『世界批評体系2 詩の原理』、筑摩書房、1974年、72頁)。

96. 「心の底では、私は今の時代を詩人にとっての空位と考えています。詩人がそこに立ち混じる必要はいささかもありません。今の時代は「古いものが」余りにも廃れてしまい、また「新しいものの」準備に余りにも沸き返っていますので、詩人は、もっと後のあるいは決して来ないのかもしれない時代を視野に置いて神秘と共に仕事をし、また、生きている人々からは、彼等が存在していないことを詩人は知っているのではないか、などという疑いを抱かれて、石で打ち殺されたりしないように、時々彼等に名刺代わりのスタンスやソネを送ること以外には、すべきことがないのです」(O. C., p. 663.)
97. 誤認=自己同一性による語る主体の自己疎外については、Jacques Lacan, 《Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je》in *Ecrits*, Seuil, 1966, pp. 93-100 を参照のこと。ラカンは、この自己疎外の最初の現れを鏡像段階と定式化し、以後の人間主体の精神的発達全体(バラノイア的な「私」の自己疎外)をこの自己疎外的宿命の延長線上に位置づけている。
98. Julia Kristeva, 《Pratique signifiante et mode de production》, in *La traversée des signes*, Seuil, 1975 を参照のこと。この論文において、クリステヴァは、語る主体内部で「統一(意味作用的・社会的集合)とこの統一に先行しかつそれを超過している過程との間に打ち立てられる関係」(Ibid., p. 11)に着目しながら、19世紀後半から世紀末にかけてのブルジョワ社会を、両面的に捉えることを提起している。一方では、この社会は、「〔・〕統一と過程の間のあるタイプの関係を支えていると同時に、この関係によって強化されている。このタイプの関係の基盤は、統一化する審級——記号、体系、社会性の一貫性を構築する審級——を特権化することにある」(p. 12)。だが他方で、この社会は、とりわけ「〈芸術〉の持つ、社会的-記号象徴的諸集団の、境界を貫通するがゆえに転覆的な機能」(pp. 12-13)がそこで明白になってきたことがよく示しているように、「有限性の危機」(p. 13)に陥っていてもいる。この社会は、「統一の、つまり論理・言語活動・家族・国家・主体という諸統一の解体のプロセス」(p. 15)に立ち至っている。「史上始めて条件が揃ったのだ、と言っ

でも統一を払いのける条件ではなく——なぜなら、それは社会性それ自体の分解と等価だから——、統一を分析し、統一に構造化する役割を与える条件が。しかしこの役割は一時的なものであり、快楽の過程がそれに優先している。統一はこの過程を妨げるのではなく、その条件となるだろう」(Ibid.)。クリステヴァによれば、この統一の解体は二つの「必然的帰結」を伴っている。一つはファシズム、つまり統一の解体の結果「自由化された欲動の過程を〔……〕全体主義的目的へと野蛮にも方向付ける」(Ibid.) 動きである。他方では、「論理的・国家的・家族的統一の相対化によって、社会的—歴史的舞台の前面に、これらの社会集合が自己を縫合するために抑圧しているものの本質の様相が露わにされている。問題となっているのは、〔……〕再生産関係において分節される快感的・快楽的なものである」(pp. 15-16)。従って、ファシズムの再来に脅えつつ、他方ではまだ社会化も言語化もされていないこの快楽(「名付けようのないリズム、原記号化する身体音楽」(p. 16))を既に刻印されている現代社会において、統一と過程の新たな関係を考えるためにクリステヴァが提起するのは、一方では、資本主義的ブルジョワ文化とは異なる文化と生産様式に属する諸社会——「我々の実践及び体系には還元されず、統一／過程、つまり記号象徴的体系／原記号の欲動という関係の別の配分に従っている」(p. 14) 諸社会——における、この関係のあり方を探ることによって、「我々の単一論理性やヨーロッパ中心主義を転位し、〔……〕我々の理性の脱中心化を目指す」ことであり、他方では、資本主義的生産様式内部でこの関係が問い質されている場である「詩的言語」の意味生成的実践の分析を通して、「語る主体の過程と再生産様式に依存した社会構造との間の関係」がどのように「欲動の社会化を規定している」(p. 26)かを分析することである。

99. Henry Roujon, *op. cit.*, p. 58. これはマラルメの「不可能な計画」——《書物》——についてマンデスが語った言葉として引用されている。ルージョン自身も、この見解に少なからず同意していたように思われる。なぜなら彼は次のような修辞疑問によってこの回想録を締め括っているからである——「詩についてあまりに高い観念を自ら作り上げていたために、ステファヌ・マラルメは、偉大な詩人であることを妨げられなかったかどうか、誰に分かるだろうか」(Ibid.)。マラルメの《書物》の計画が、詩人という矛盾の場と統一との間の新たな関係の模索となっていることを論証するためには、別途の考察が必要になる。ここでは、クリステヴァが『詩的言語の革命』において (Julia Kristeva, *La révolution du langage poétique*, Seuil, 1974, C—VIII を参照のこと)、キリスト教以前からインド—ヨーロッパ全域に広まっていた主権の二重のあり方——否定性の追放と引換に法と秩序と社会性を創始するものとしての殺害された父(彼女はこれをデュメジルに倣って《ミトラ的》機能と呼んでいる)と、その裏面的存在として、暴力や破壊や殺害や快楽を代表する人間—動物(同様に《ヴァルナの》機能と呼ばれている)——のモデルに従って、《書物》を、二つの主権——「常に既に死んでいる立法者の系列」である「人間—老人—祭司—死者の系列」と、「暴力的で享楽する推進者、《人間—自然》の系列」——の相互干渉によって、社会集合の二大機能である「再生産に結びついている快楽と、法を創始する死とを、唯一の機能へと縫い合わせる」(Ibid., p. 563) 試みとして分析していることを、単に指摘するにとどめておく。